

復興のランドスケープ

—東日本大震災後の防潮堤建設を再考する—

田中彰吾 東海大学総合教育センター教授

〔論文〕

The Landscape of Reconstruction: Reconsidering the Seawall Construction Project after the Great East Japan Earthquake

Shogo TANAKA

Tokai University, Liberal Arts Education Center

After the Great East Japan Earthquake, local governments planned a new project of reconstructing enormously higher seawalls (approximately 7–16 m) to insulate the country from future tsunamis, following the guidelines presented by the government and relevant ministries. This project has been widely criticized not only by environmental activists and organizations that emphasize the significance of the ecosystem of coastal areas but also by the residents of the coastal regions who are anxious about the negative impact on their source of livelihood such as fishery and tourism. This paper aims to reconsider the relevance of the project from the perspective of the idea of the landscape, which enables to link the ecological perspective and the residents' needs for livelihood. Landscape is a perceptual feature of the land, which is constructed based on both the natural forces and people's socio-cultural activities. Thus, it is not merely a dichotomy of nature/culture or natural/artificial. The Sanriku Coast (northeast Honshu on the Pacific Ocean), where the tsunami caused the most devastation, has been traditionally known for its beautiful landscape: the rocky shoreline with countless bays is dotted with small fishing villages. Recent ecological studies emphasize that human–nature interactions in coastal areas, such as sea-farming and afforestation, have contributed to maintaining this landscape by promoting biodiversity. This type of coastal area is affirmatively conceptualized as “sato-umi” by landscape researchers and ecologists. From this perspective, it is suggested that the new seawalls do not only damage the ecosystem but also impede the human–nature interactions that is characteristic of the coastal areas, and thus, the traditional landscape will be irrevocably destroyed. It is proposed that the alternative way of constructing a seawall, that is, setting it back from the shore and retaining the sato-umi area, is a more desirable solution for this problem.

Accepted, Aug. 24, 2015

1. はじめに

本稿執筆中の現在、2011年の東日本大震災からすでに4年半が経過した。この間、政府、地方自治体からNPO、民間企業、学会、個人まで、さまざまなレベルで復興に向けて数多くの取り組みがなされてきたし、それらは現在も進行中である。「復興」といってもその意味するところはひとつではない。電気、ガス、上下水道、道路、鉄道など、地震と津波によって破壊された基礎的な生活インフラを元に戻すことに力点がある事業は、どちらかというところ「復旧」に意味が近い。それに対して、居住地の高台移転、公園づくり、商店街の再興、コミュニティ形成、観光開発などは、震災によって失われたものに新たな要素を付加して再建する「創出」に意味合

いが近い。もちろん現在では、復興の比重は後者に移行している。

ここで論じるランドスケープは、復旧と創出、どちらの意味合いでも理解できる両義的な性質を持つ主題である。本稿の後半では津波対策として建設が予定されている防潮堤について取り上げるが、現状では、以前より大幅に高い防潮堤設置が予定されており、そうなれば海と陸を分断する新しいランドスケープを「創出」することになる。他方、ランドスケープに配慮したセットバックと呼ばれる代替案を選択すれば、海と陸が連環するむしろ伝統的な三陸のランドスケープを「復旧」するのに近づいてくることが分かるだろう。しかし、そうでありながら、その「復旧」のほうが、じつは近代的な都市開発の発想を超えてゆく真の「創出」に近いことが以下の議論から理解できるであろう。

先走って議論を進める前に、本稿で用いる「ランドスケープ (Landscape)」という用語について確認しておく。ランド

本論文は、『文明』投稿規定に基づき、レフェリーの査読を受けたものである。原稿受理日：2015年8月24日

スケープは、日本語では「景観」「風景」「景色」など、文脈に応じてさまざまな訳し方をする多義的な用語であるが、基本的には、人間が周囲の環境に対して一定の有意なまとまりを知覚するさいに用いられる概念である。環境心理学者の太田(2007)は、ランドスケープに「景観」という日本語を対応させ、「われわれの眼前あるいは周囲に広がっているひとまとまりにとらえうる世界」(p.42)としている。本稿では、ほぼ同じ意味合いで「ランドスケープ」というカタカナ表記を用いることにする。ランドスケープは「景観」だけでなく「風景」「景色」とも訳せるし、日本語としてはそれぞれ意味するところが少しずつ異なるからである。

さて、本稿で最初に踏まえておきたい事実は、2011年3月11日を境に東北地方沿岸部のきわめて広い範囲でランドスケープが一変したという事実である。ここに示した二枚の写真は、いずれも2011年3月、震災発生から間もない時期に撮影された被災地である(二枚とも仙台市ホームページより)。写真1では、陥没した地面の向こうに大量の瓦礫が見える。写真2では、手前に瓦礫の山があり、それをせき止めるように鉄筋コンクリートの建物がかろうじて残っている。瓦礫は、破碎された家屋の建材、押し流された屋根、潰れたクルマ、コンクリート片、歪んだ鉄筋などで、これらの下に何があったのか想像するのは困難である。そもそも、こうした光景をランドスケープと呼ぶことさえためらわれる。

なぜかという、写真に映し出されている景色が、そこにもともと存在したであろう人々の社会的活動の痕跡をほとんど残していないからである。言うまでもなく、ランドスケープは、ある自然環境のなかで人々がみずからの生活の糧となる

活動を行い、その活動がたとえば漁港や住宅地として形になり、その土地の居住者にも非居住者にも一定のまとまりある風景として見えるようになったものである。先の太田(2007)も、Landscapeの語源をたどると「場所とそこに暮らす人々とのダイナミックな結びつき」(p.42)という意味があったと指摘している。しかし、ここに掲載した写真から人々がどのような活動をそこでしていたのか想像するのは難しい。そもそも、震災以前にどのような場所だったのかを想像することさえ難しい。写真に映るおびただしい瓦礫は、社会的活動の意味連関から外れた、剥き出しの物体の集積である。

現象学的地理学でしばしば指摘されるどころだが、空間(space)と場所(place)を異なる概念としておさえておくことが必要である(トゥアン, 1993; レルフ, 1999など)。どちらも広がりという意味だが、空間は、三次元の座標系を外側から適用することで理解できる抽象的な広がりであり、それ自体として意味を持っているわけではない。場所は、そこを内側から生きる主体が存在し、その場所の具体的性質が主体の行動を制約するとともに、主体の行動によってその場所がさまざまに意味づけられる「生きられる空間」である(田中, 2014)。

ランドスケープは、空間ではなく、場所の知覚的表象である。ある土地で生活する人々が周囲の環境とかかわり、さまざまな社会的活動を行った結果として形成されたその場所の景観である。であるからこそ、ランドスケープは、その場所につけられた名前とともに、生活にまつわる人々の記憶やナラティブとも連動し、そこで生活する人々のアイデンティティの一部を構成する(Tilly, 1994)。さきの写真は、こう



写真1 (提供: 仙台市)



写真2 (提供: 仙台市)

した社会文化的意味を津波がすべて押し流し、有機的な場所を無機質な空間へと差し戻したかのように感じさせる点で、それを見る者にきわめて荒涼とした印象を与える。

以上の観点からすると、復興過程で形成されてゆくランドスケープは、被災地域においてどのような生活が再興されているかを映し出す鏡である、ということになるだろう。また、逆に、ランドスケープをどのように復興するかということが、被災地域における人々の生活のあり方を決定していく重要な要因になることも理解できるだろう。

2. 自己は環境と切り離せない

筆者は、現象学的心理学と呼ばれる分野を専門としている。この分野は、一方で心理学を介して環境心理学へとつながっており、他方で現象学を介して人文地理学とつながっている。ランドスケープは、都市計画、建築、造園などの分野で専門的に議論されることが多いが、人々が快適に生活できる環境デザインという点では環境心理学と、人々の生み出した土地の文化的景観という点では人文地理学と接点を持っている。以下では、筆者の専門領域から考察を始め、そこからボトムアップに現在のランドスケープの問題へと議論を進めたい。

ここで、筆者の立場から見て、従来のランドスケープ論で問題にされてこなかったと思われる論点をひとつ指摘しておこう。それは、私たちが「自己」と呼び慣わし、一定の自律性や独立性を持つと考えている人格的な存在が、皮膚の限界を超えて環境へと拡がっている、という点である。ここでの「自己」は「心」と言い換えても構わない。

現象学において以前から議論されてきたように、自己は身体化されることで初めて自己として存立する（メルロ＝ポンティ、1967/1974 など）。身体がなければ、自己は同じ自己ではありえないという意味である。心身二元論で知られる近代哲学の祖デカルト（1596-1650）は、自己の本質が「われ思う」という意識のはたらきにあり、身体を失ってもそのままの姿で残るだろうと主張した（デカルト、2001）。外部の世界や他者に依存しない「われ思う」という自律的な意識作用として自己を位置づけ、さらに身体から切り離された抽象的な機能として心を理解するデカルトの見方は、近代初頭に成立して以降、心や自己を理解するうえでの暗黙の前提として大きな影響を与えてきた。

しかし、このような見方は、近年の心理学や心の哲学では変更を迫られている。心のはたらきは根源的に身体化されていることが強調されつつあるのである。デカルトの言う「われ思う」という一見すると純粹に心的に見える思考作用も、もともと音声として他者に向けられていた外言が自己を相手とする内言に転じたものであり、身体行為にその起源を持つ（河野、2006）。思考という抽象的な心的機能でさえ行為する身体とは独立には存在しえないのであるから、知覚や感情はなおさらであり（Gibbs、2006）、心のはたらきの主体として現れる自己もまた同様に、身体とは切り離せない不即不離の関係にある（Gallagher、2000；田中、2011）。

自己が身体化されて存在するというこの意味は、たんに自己の主体性が身体と切り離せないということにとどまらない。身体は単独で真空管のなかに存在できるわけではなく、具体的な行為が成立する場所としての環境を必要とする。たとえば、歩くという行動は、一定の強度と安定性と広がりを用意した地面がなければ成立しない（先の写真にあったような瓦礫の山や、深く新雪が積もった斜面を想定するとよい）。サッカーをして遊ぶには、ボールと、ボールが転がりバウンドするのに十分な広さの地面と、そのボールをやり取りする相手が必要になる。自明な事実に聞こえるかもしれないが、呼吸をする、食事をする、食料調達のための漁をする等、生存に直結する行動を考えると、環境が自己の存立にとって本質的な重要性を持っていることは即座に理解できるであろう。

このように、デカルト流の二元論を覆し、身体から切り離された心に自己の本質を置かない立場からすると、自己の見方には次の4点で変更を加える必要がある。（1）自己は身体化されており、身体を離れて存在しえないこと（embodied）、（2）自己は、たんに身体化されているだけでなく、その身体が行動することで主体性を実現すること（enactive）、（3）身体化された主体の行動は、その行動を可能にする環境に埋め込まれていること（embedded）、（4）したがって、自己の自律性はあくまで相対的なものであって、基本的には環境と相互依存的関係にあり、行動を通じて環境へと拡張していること（extended）。以上4つの特徴は、すべてEから始まるため「4E」と略され、近年の心の科学では「4E cognition」と言及されることも増えてきている（たとえば Menary、2010）。

4Eという特徴を持つ自己の比喩として、クルマを考えてみるとよい。クルマがクルマとしての機能を果たすには、パ

ーツが組み合わさった構造体としてのクルマがあるだけでは十分ではない。クルマを動かすのに必要なエネルギーとしてのガソリン、安定した運転が可能な舗装路、遠い目的地までを結ぶ道路のネットワーク等がすべて揃って初めて、クルマ本来の機能が実現される（環境の整備が依然として不十分なりニアモーターカーを対照的な事例として思い浮かべると、より実感をもって議論を把握しやすいのではないだろうか）。

私たちが「自己」と呼んでいるものは——デカルトはそこに世界や身体から切り離しても成立する自律性を読み込もうとしたが——適切な環境が与えられていなければ自己として機能できない。4Eのように身体と環境を重視するエコロジカルな観点から見た場合、河野（2011）も指摘するように、「人間個体とは環境と別に語ることでできる精神」でもないし、「いかなる環境にあっても一定の行動傾向を示す存在」でもない。「人間個体はそれを取り囲んでいる環境との相関でとらえることが方法論的にも正しい」（引用はすべて p. 51）ということになる。

このような自己は「エコロジカルな自己」と呼ぶのがふさわしいが、エコロジカルな自己は、身体とその行為を通じて、環境へとゆるやかに広がるひとつのシステムとして理解する必要がある。これは、次のことを意味する。第一に、どのような環境に置かれており、その環境がどのような行為を可能にするかに応じて、基本的な自己のあり方が規定されるということ。第二に、自己が一貫性のあるパーソナリティ上の特性を示すように見えるのは、それは環境が安定しているためか、もしくは、環境が変化しても、環境とかかわる行動パターンが一貫しているためである、ということである。

ランドスケープに話を戻すと、私たちは一般に、「景観」や「風景」といった言葉で語られる「場所の外観」がランドスケープの本質であるかのように考えてしまうが、より深い論点があることに留意すべきである。ランドスケープは、知覚を通じて現れる一定のまとまりある環境であり、その環境は、そこで生活する人々にとって、自己を自己として存立させている不可欠の要因である。その意味で、日々の生活で私たちが繰り返し目にするランドスケープは、環境へと広がる自己の半身といってもよいほど重要だということである。

3. 人々の活動から環境を理解する

以上のように議論の前提を設定するなら、被災地における

ランドスケープの復興を考えるうえで第一に求められるのは、特定の場所がそこで生活する人々にとって本来どのような行動や活動を可能にする環境であったのか、十分に知ることである。

この点は、ランドスケープ研究では「地域の文脈を理解する」「地域を読む」等と言及される。複数の事例とともに検討しよう。村上（2012）は、宮城県気仙沼市における東日本大震災での津波被害が戦後に開発された新市街地に集中していたという事実をあげ、その一因は、地域文脈との乖離が戦後の都市開発政策のなかで広がり続けたことにあると指摘している。過去の空中写真を参照すると、戦前から存在した気仙沼の旧市街は標高の高いエリアや傾斜地に立地しており、低地は塩田や水田としてしか利用されていなかったことが確認できる。人々は、歴史的に一定の頻度で訪れる津波や豪雨が低地で生じることを知っており、住居を建設する場所には選んで来なかったのである。

ある環境のなかで、どのような活動が可能であり、またどのような活動が不可能であるのかは、その土地で暮らす人々には生活上の知恵として継承されている（それは必ずしも明示的な知識として伝達されるとは限らない）。もしくは、古い時代から継承されている人々の活動として残されている（その環境で継続できない活動は消滅してゆく）。いわば、「集合的な実践知」と呼ぶべきものが人々の活動の中には残されており、それを軽視するようなしかたで土地利用を進めても、災害に対するレジリエンスを低める結果を招く恐れがあるということである。

もう少し規模の小さい事例に目を向けてみよう。篠沢（2012）は、宮城県石巻市で実施したインタビュー調査を通じて、被災地の高齢者の多くがもとの居住地の裏山で畑仕事を行っていたことを見出している。畑では、白菜、トマトなどの野菜、ブルーベリーのような果物、仏壇に備える花などが栽培されており、広い畑の場合は1ヘクタールにもなるという。東北の漁村集落では、家主は漁に出ているが、その父母の多くは裏山の畑で農作業を行っており、そこで栽培された作物が不漁のような非常時に自給自足するための重要な食料供給源になっている。つまり、漁村といっても実体としては半農半漁に近い場所が多く見られるのである。しかも、これらの農地はおおむね裏山の高台であったため、津波の被害を逃れた。こうした事実を踏まえて篠沢はこう指摘する。

「半農」を受けもっていた農地と高齢者の関係を把握・考慮して、被災を免れた農地近くに集合住宅や分区分園から構成された農住混合型の災害公営住宅などを整備し、集落（の一部）を移転することは、居住者の精神的支えの一つにもなるでしょう。（p. 62）

ここに見られる農作業は、海に面した土地に暮らし、一方で漁業によって生計を立てながらも、天候や季節によって収入にばらつきが出やすいという、与えられた環境条件に適応するなかで生み出されてきた活動であろう。漁業という生業を支える副業として、「半農」が裏山で行われていたのである。

微小な事例としては、窪田（2013）が報告している岩手県大槌町の場合が興味深い。窪田は、被災した住民たちに地域の写真を持ち寄って語り合ってもらう機会を設けたり、空き家となったスペースを活用して地域の思い出を語らう場を設け、ヒアリングを実施している。ヒアリングを通じて明らかになったことのひとつは、地域住民の集まり方である。国の補助で建設された地域センターやグラウンドがあるものの、住民が一堂に会する機会は運動会が開かれる年一回程度しかなかったという。むしろ、散在する商店の店先で会話したり、近隣の仲良しの家で茶飲み話に興じたり、少人数でインフォーマルな集まり方をするほうが主であつたらしい。窪田は、こうしたヒアリングをそのまま復興プランに結びつけられるわけではないとしつつも、次のように述べている。

復興まちづくり計画を考えるにあたっては、例えば店舗を1ヶ所に集中せずに、分散させたほうが良いし、公民館の広場を過剰に大きくしてもあまり使われないうらから小ぶりにして建物と一体的に使えるようにしておくべきであるし、お祭りのときに御旅所として使える空気を適地に分散して確保しておくなど、空間づくりのポイントは了解できる。…（略）…こうしたことは明白なように見えて、実際に家を建てる時に配慮されるとは限らない。地域住民の方に対して、空間づくりに携わる者が空間言語につながる規範としてまとめて提示しなければご理解いただくことは難しい。（p. 233-234）

裏山での農作業とは異なり、こちらは地域に暮らす住民自

身もはっきりとは自覚していない活動である。ただし、明確な知識として保持されていないとしても、一種の生活の知恵として人々の活動の中に継承されている。インフォーマルなおしゃべりや会話は、集落内での迅速な情報伝達に役立ったり、フォーマルな話し合いによる意思決定に影響を与えたり、何らかの機能を果たしてきたに違いない。その詳細はさしあたり不明だが、この例に見られるように、何気ない人々の活動は、外部の者が共同体に入って行って観察することで初めて可視化できる場合もあるし、それをサポートするしかたで土地や建物の再建を促すことで、当の活動と連動するランドスケープを再生することも可能になる。

ここで本節を閉じる前に、理論的な観点から補足を加えておこう。南（2006）は、環境心理学の立場から、ランドスケープについて考える意義を次のように述べている。

心が心のみで機能するのではなく、目に映る風景と生き生きと響きあうのであれば、心を考えるにあたり、心だけを切り取り対象とするのは不十分であるし、目に映る世界を考える場合に、表層的な形態だけに目を奪われてしまうと、心を切り離れた思考になる。（p. 272）

この指摘はその通りなのだが、これに加えて筆者が述べておきたいのは、だからこそ人々の活動に着目して地域の文脈を理解することが重要だということである。というのも、このような方法こそ、主観（心）と客観（形態）のどちらにも偏らずにランドスケープを理解する鍵だからである。

客観的な観点からある地域を見れば、地形、水系、緑地、宅地、日照、気温、色彩など、測定可能な要因を環境から切り出してくることはできるが、そこで生活するというアクチュアリティをもってランドスケープを評価することができない。他方、主観的な観点だけに立脚すると、その地域が与える印象や美観だけがクローズアップされることになり、ランドスケープの何をどのように保全または創造すべきなのか、公共性のある議論が可能にならない。ランドスケープを一枚の図案とすると、環境は背景を、そこでの人々の活動は前景を構成する。環境の条件を変えれば活動は変化するし、ある活動を維持するには、それを可能にする環境を保全せねばならない。

人々の活動と、それを取り巻く環境とが組み合わさって、まとまりのある景観や風景として形成されるものがランドス

ケープである。したがって、ランドスケープを保存するにせよ創造するにせよ、特定の環境と、そこでの人々の活動を相補的なものとしてとらえ、それを全体として考慮する必要がある。

4. 生業の観点から防潮堤を再考する

上に見た通り、市街地の建設という大規模で組織化された活動から、おしゃべりのようにインフォーマルでささやかな活動に至るまで、活動と環境のスケールをどの範囲に設定するかに応じて、理解できる地域の姿も、浮かび上がってくるランドスケープも異なる。近景、中景、遠景という概念がランドスケープ研究でもしばしば用いられるが（三船ほか、2009）、そうした概念が研究上の単位として意味を持つもの、人間の活動のスケールに応じて、知覚的なまとまりをもって現れるランドスケープも異なるからである。

被災地におけるランドスケープの保全、復旧、創造をめぐるでも、もちろん、近景、中景、遠景、それぞれのスケールで問題にすべきことがある。ただ、本小論ですべてを取り上げられるだけの準備はないし、また、本誌が文明論的観点に重きを置くものであることを考えると、遠景のランドスケープをここで論じるのが適切であろう。以下では、すでに各種の議論がなされているが、被災地の沿岸地域に建設予定の防潮堤の問題について、ランドスケープとの関係で取り上げたい。なお、前節で人々の「活動」としてとらえたものは、ここではより大きなスケールで「生業」としてとらえる。「活動」の概念に対応するのが近景や中景だとするなら、「生業」や「生活」はおおむね遠景に対応するであろう。

防潮堤の問題について、経緯を先に確認しておきたい。東日本大震災の後、2011年6月末に内閣府の中央防災会議が津波防災対策について提言を行った（内閣府、2011）。この提言と連動して、海岸を管理する関係省庁である国土交通省は、2段階の総合的津波対策を指針として打ち出す（国土交通省、2011a）。2段階とは、数十年から百数十年に1回という頻度で発生が想定される津波でレベル1（L1）に設定されるもの、および、数百年から千年に1回という頻度で発生が想定される津波でレベル2（L2）に設定されるものである。三陸沿岸部の場合、明治三陸地震（1896年）、昭和三陸地震（1933年）、チリ地震（1960年）の際にそれぞれ津波を経験しており、これがL1に対応する。今回の東日本大震災は

L2に対応する。

基本的に、L1については防潮堤によって予防するというのが国の指針であり、直接に海岸を管理する県と市町村は、その指針に応じて、2011年の7月から8月にかけて防潮堤の整備計画を策定した。この後の計画実施過程については各地でさまざまな経過をたどっている。たとえば、宮城県（2015）がホームページ上で公開している情報によると、復旧・復興事業を実施することになったのは382地区海岸で全243.7kmである。うち、2015年5月末時点で工事が着手されているのが208地区海岸142.4km、工事が完了しているのは43.8kmに過ぎない。完了しているのは、利害関係者が少ないと思われる農地海岸や建設海岸である。逆に、関係者が多い漁港海岸については、整備予定151地区海岸85.7kmのうち、工事に着手済みなのは依然として36箇所21.4kmにとどまり、工事完了箇所にはたっては2.7kmのみである。

各種メディアによる報道ですでにある程度知られているように、防潮堤の建設を待望する声も地域によってなくはないが、高さや建設方法が実情にそぐわないとの意見が非常に多いのが実態である。先の指針でL1に相当する防潮堤の高さは地域によって異なるが、低い地域でも7m程度、高い地域では16m程度が予定されている。このような高さの防潮堤が各地の海岸に建設されるとなると、その地域のランドスケープが一変することは明らかであろう。横山（2014）が指摘している通り、「防潮堤が多くの住民に喜ばれず問題がくすぶっているのは、「浜の感覚」にそぐわないからである。

ここで言う「浜の感覚」を正確にとらえるのは難しいが、基本的にはその地に暮らす人々の生活実感のことであり、生業に由来するものだと言えそうである。具体例を通じて考えてみよう。たとえば、長峯（2015）によると、気仙沼大島では防潮堤問題は次のような経過をたどっている。気仙沼大島は陸中海岸国立公園に指定され、「緑の真珠」と形容されるほど豊かで美しい自然に恵まれた島であり、水産業だけでなく観光業も島の主要な産業となってきた。ところが、この地も防潮堤計画の例外ではなく、2012年7月に県と市が島民に提示した資料では、島の玄関口である「浦の浜」に7.8m、島を代表する海岸である「小田の浜」と「田中浜」には11.8mの防潮堤建設計画が示されたという。

三つの浜のうち、とくに小田の浜は、半円形にカーブする

砂浜、遠浅で青く透き通った水を有し、防砂林の向こうになだらかな緑の山を望む、日本の美しい海水浴場を絵に描いたような場所である。環境省が選ぶ「快水浴場 100 選」のなかでも特選に位置づけられている（東北地方での特選は、岩手県の浄土ヶ浜とこの小田の浜のみである）。このような場所に高さ 12m 近い防潮堤を立てれば、ランドスケープが著しく損なわれ、観光客が減少し、地元の観光業にとっても大幅な減収になるであろうことは容易に想像がつく。また、こうした防潮堤が生態系に与える影響を考えれば、長期的には美しい海岸そのものが保全できなくなるであろう。

防潮堤を建設すれば、観光を軸とする復興はおそらく不可能になるため、地域住民としては容易に同意できない。その後、2014 年 2 月になって、小田の浜の防潮堤建設は当初の 11.8m から 3.5m へ、原形復旧の高さに見直す方針が県から示された。これはきわめて例外的な事例らしく、宮城県が管理する海岸では L1 基準の防潮堤建設計画が実際に見直されたのは初めてであるという。計画を再検討してほしいというのが大半の島民の要望であったことを考えれば、この方針変更は肯定的に評価できるものであろう。

この事例とは全く異なるが、竹沢（2013）が報告している岩手県釜石市箱崎地区の場合も見ておこう。箱崎は大槌湾に面する半島で、三陸でもきわめて良好な漁場として知られる。一年の半分以上は定置網漁が行われている他、春から夏はウニ漁、冬はアワビ漁が行われ、ワカメやホタテの養殖も盛んである。複数の漁を組み合わせることで、一年を通じて漁業で安定した収入が得られる豊かな漁業集落である。そのため、若い漁業者の比率も高く、他の地区に比べて後継者は順調に育っているという。

この地区については、岩手県と釜石市から 14.5m の防潮堤建設計画が住民に提示された。ビルのフロアで言えば 4 階から 5 階に相当する高さであり、これだけの高さの防潮堤が立つと、安全性は高まるかもしれないが、低地に暮らす住民からは海が見えないことになる。これは漁業従事者にとっては生活環境を根本から変えてしまいかねない。竹沢が紹介している漁師の言葉にもある通り「漁師ってのは海が見えるところに住んでいないと駄目」で、「家から海が見えるのでなかったら、漁師じゃあない」のである（引用はともに p. 210）。日々、天候に応じて変わる海の状況を視覚的に確認することで、その日の漁のしかたを想定するのが漁師の日常であり、

それなしには「浜の感覚」は保てないであろう。

こうした点を踏まえて、海岸からより内側に入った標高 10m の土地に 4.5m の防潮堤を建設する、いわゆるセットバック案が住民案として取りまとめられ、2011 年 11 月に釜石市への要望として提出された。この案であれば、同じ高さの防潮堤を確保しつつも、海を眺めながら生活するという漁民の習慣を守ることができる。しかし、小田の浜の例とはまったく違って実質的な再検討はなされないまま、当初案と大きな違いのない修正案が後に市から再提示されたという。

防潮堤は、各地で計画通りに建設されれば、観光業にも漁業にも悪影響をもたらす可能性が高い。この問題をめぐる先行事例として、近年、北海道の奥尻島に言及されることが増えている（例えば松本、2014）。1993 年 7 月の北海道南西沖地震で津波被害が発生した奥尻島では、これを受けた災害対策として、全島をめぐる防潮堤が建設され、1996 年に工事が完了した。しかしその結果、周辺の生態系と自然環境が大きく変化して海藻が以前のように取れなくなっただけでなく、海岸沿いの道路から海が見えなくなり観光客も減少したという。1990 年と 2010 年を比較すると、漁業者は約 40% に、観光客は約 60% に減少している。もちろん、防潮堤のみがこの変化をもたらした原因ではないだろうが、島民の生業に良い影響を与えなかったことは確かなのである。

5. 里海のランドスケープに向かって

防潮堤の問題については、生態系を重視する観点から深刻な懸念がすでに表明されている。そもそも海岸は、海と陸という二つの異なる環境をつなぐ移行帯であり、比較的狭い範囲で環境が大きく変化するという特徴を持っている。したがって、生息する動植物の種類も豊かな場所であり、地域全体の生物多様性を高める重要なエリアである。こうした場所に巨大な防潮堤を建設すれば、海と陸の連続性を破壊し、地域全体の生態系を劣化させてしまうことになる（日本自然保護協会、2013）。

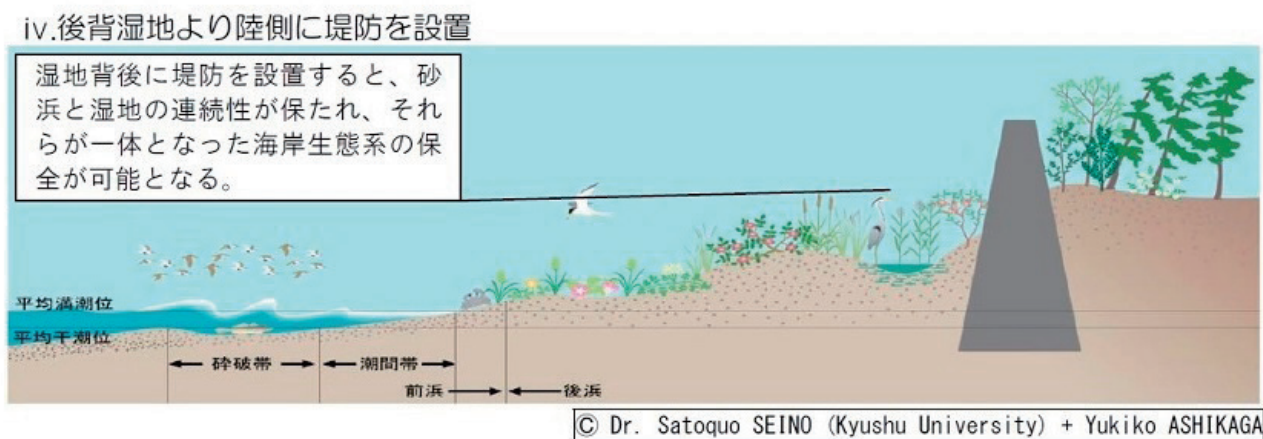
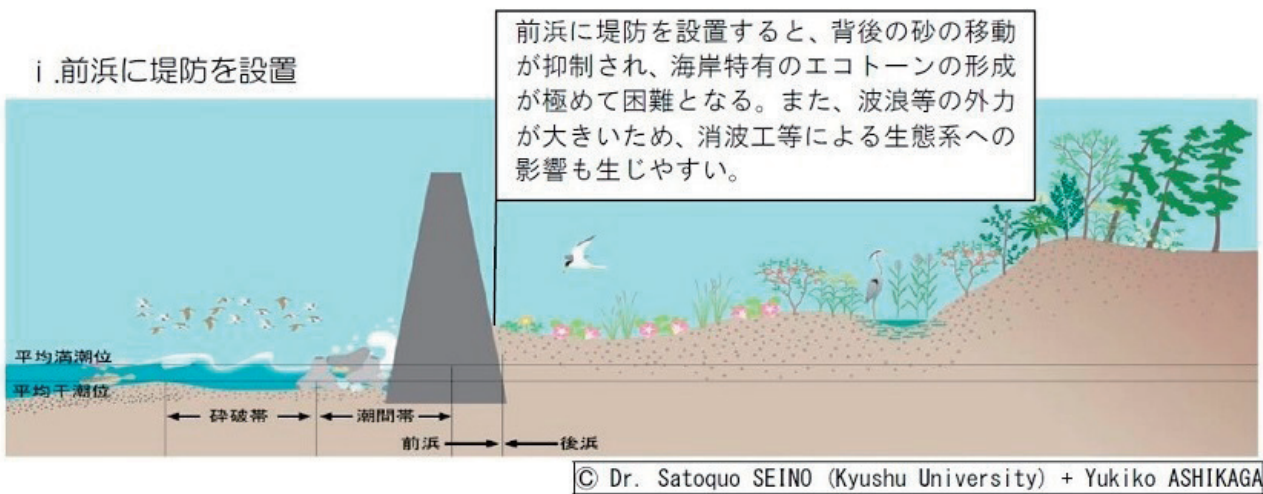
この点については、国土交通省（2011b）が取りまとめた「河川・海岸構造物の復旧における景観配慮の手引き」でも、一定の配慮が示されている。セットバック方式と住居の高台移転を組み合わせれば、防潮堤と同様の安全を確保できるだけでなく、海と陸のあいだに不必要な分断をもたらさずに済む（図を参照）。じつは、この図からは推測できないのだが、

10mの防潮堤を建設する場合、私たちの目に入らない底面部分は幅が約50mにもなる。これが海と陸の生物を分断することは、専門家ではない一般市民にも容易に分かることであろう。

生物学者の田中（2008）は、ヒラメなど日本の沿岸に生息する魚類の稚魚研究にもとづいて生態系に関する考察を発展させ、「森里海連環」という考え方を提唱している。豊富な魚類が生息できる海は、川や地下水から流れ込む陸の豊かな栄養分によって支えられている。川の上流にあたる陸地では、海から蒸発した水が雨になってブナ林を典型とする広葉樹林を育てている。そこでは、微生物によって分解された広葉樹の腐植土が地層内で溶存鉄を形成する。これが川や地下水から溶け出して海に流れ込み、海中で植物プランクトンや海藻が育つのに不可欠な栄養分となり、さらにそれが魚の餌となる。こうして、水を通じて海と森が環状に連鎖することで、海岸の生態系は維持されているのである。

震災の津波被害は、非常に逆説的なしかたで、人間の生態系への関与のしかたを明かしている。被災した三陸沿岸では、津波が防潮堤を乗り越えて建物を押し流した後に海水が流れ込み、そこにできた干潟にアサリが現れたのである（田中，2014）。つまり、海と陸を分断し、アサリが生息できなくなるようなしかたで人々が沿岸部に居住していたということなのである。逆にこのことは、海と森が環状に連鎖する生態系を考えるうえで、人間の生息地である「里」が重要な鍵を握っている、ということも示している。

日本の沿岸部、とくに三陸のように切り立った陸地と海が連続するような場所では、人間が生活する里は、一方で森に連続して「里山」を形成するだけでなく、他方で海に連続して「里海」を作っている。今回の震災では、とくに津波の被害が大きかったのは、岩手県の宮古湾周辺のように、里山と里海がつながっている地域だったと指摘されている（武内，2012）。里海は、近年の震災復興の文脈でしばしば聞かれる



図：防潮堤設置位置の比較（上図は当初案，下図はセットバック案の一例。いずれも国土交通省2011bより転載）

ようになってきた概念である。里山と同様、人間の集落に隣接する海を指す概念であり、人手が加わることによって生物多様性と生物生産性が高くなった沿岸海域を指す（環境省ホームページ参照）。

つまり、人間の居住地である里は、生態系にとってきわめて両義的な位置を持つ場所であり、森と海の連環を分断する面を持っていると同時に、干潟や森を維持することで生物多様性を高め、両者の連環をポジティブなものに変化させる面も持っているのである。里海という概念が震災復興の文脈でしばしば論じられているのも、日本の沿岸部における伝統的な生活様式が、森・里・海のポジティブな連環を可能にするものであったことが再発見されつつあるからである。

本稿の文脈に即して整理すると、里とは、活動や生業を含みこむ「生活」に対応する場所のことである。里という人々の生活の場を介して森と海が連環する姿は、最も距離を大きく取ったときに見える遠景のランドスケープである。仮に、防潮堤の建設がそのまま進められたとすると、最遠景のランドスケープである森・里・海の連環に対してどのような影響を与えるか、ここまでの議論からすでに明らかではないだろうか。巨大な防潮堤が海岸にひとたび建設されれば「里海」と呼ぶ場所が成立する余地はほとんどなくなる。「森と海の連環」は、「里における分断」に姿を変えることだろう。森と海が人里によって分断されたランドスケープが、日本の沿岸部一帯に出現することになりかねない。

筆者は、沿岸部に生活する人々の安全を確保しないではないと言っているわけでは決してない。津波対策が本当に現状の防潮堤建設計画でよいのか、ランドスケープを重視する立場からしても大いに疑問だと主張しているのである。3.11の津波被害の後、被災地域では各種の調査が行われているが、その中には、津波到達地点のすぐ陸側に被害を逃れて神社や旧街道が残っていたというきわめて興味深い報告が見られる（篠沢、2012）。現在のような防潮堤を建設する技術が存在しなかった過去の時代にも、繰り返される津波に備え、生き延びるための知恵がなんらかの形で存在したのではないだろうか。鎌田（2014）は、多くの神社が津波被害を逃れ避難所として機能した事実を踏まえ、「生態智」という言い方で、神社が立地する聖地に残されている知恵をこう表現している。

日本の聖地文化とは、日本列島の地質・地形・風土の

中から生まれた「生態智」すなわち「自然に対する深く慎ましい畏怖・畏敬の念に基づく、暮らしの中での鋭敏な観察と経験によって練り上げられた、自然と人工との持続可能な創造的バランス維持システムの知恵と技法」を深く宿しているのである。（p. 17）

歴史的に長い時間を経て継続されている人々の生活は、人間を含めて地域の生態系を維持できる性質を必ず持っている。ランドスケープは、そうした人々の営みが、環境との相互作用によって生み出した造形物であり、生態智と呼べるようなものを形として残しているだろう。「里海」という概念で、私たちはそのような生態智のひとつを今になって見出そうとしているのである。

6. 結論

本稿では、自己・身体・環境を連続するものとしてとらえてきた。この立場からすると、ランドスケープはたんなる外観の問題には還元できない。ランドスケープは、そこで生活する人々の人格的自己を映し出す一種の鏡とさえ言うものである。これは、決してランドスケープが人々の心のなかにある主観的なものだという意味でもなければ、見る者の主観を離れた客観的な外観であるという意味でもない。一人一人の微小な行動、少人数での活動、共同体で組織化された生業、さらには地域の人々の生活、というさまざまなスケールで、人と環境とが相互作用を繰り返すなかで、近景・中景・遠景のランドスケープが生み出されてくる、という意味である。ランドスケープという概念は、それ自体が、主観と客観、精神と自然を切断して考える近代的な思考様式への挑戦であるとも言える。

東日本大震災の復興過程で進められている防潮堤計画は、地域住民の生業に由来する生活実感には明らかにそぐわない。のみならず、防潮堤は、海と陸をつなぐ海岸という移行帯の生物多様性を劣化させ、地域の生態系に少なからず悪い影響を及ぼすことが予想される。現状の計画を見直し、森と海の連環をポジティブな方向で成立させる「里海」の場所として海岸地帯を変えることが必要である。安全対策を考えれば、何らかの防潮堤を建設しないわけにはいかない。しかしそれは、前浜から陸側にセットバックする建設法で代案とすることができる。現状通りの前浜での防潮堤建設によって

「里における分断」のランドスケープを選択するのではなく、「里海」と呼べるランドスケープを次世代に残す選択をするほうが、この問題にとっては望ましい解決の道筋である。それが実現されれば、「グリーン復興」という理念も空疎なローガンに終わらない実質的な意味を持つであろう。

参考文献

- デカルト, R. (2001). 『デカルト著作集 2: 省察』(所雄章訳), 白水社.
- Gallagher, S. (2000). Philosophical conceptions of the self: Implications for cognitive science. *Trends in Cognitive Sciences*, 4, 14-21.
- Gibbs, R. W. (2006). *Embodiment and Cognitive Science*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 鎌田東二. (2014). 「環境から生態系へ——自然と共に生きる」比較文明学会『災害と文明: 東日本大震災と防潮堤問題を考える・報告書』(pp. 4-6).
- 国土交通省. (2011a). 交通政策審議会港湾分科会防災部会, 「港湾における総合的な津波対策のあり方(中間とりまとめ)」(平成23年7月6日). (<http://www.mlit.go.jp/common/000149434.pdf>)
- 国土交通省. (2011b). 水管理・国土保全局, 「河川・海岸構造物の復旧における景観配慮の手引き」(平成23年11月). (http://www.mlit.go.jp/river/shinngikai_blog/hukkyuukeikan/tebiki/tebiki.pdf)
- 河野哲也. (2006). 『<心> はからだの外にある——「エコロジカルな私」の哲学』日本放送出版協会.
- 河野哲也. (2011). 『エコロジカル・セルフ』ナカニシヤ出版.
- 窪田亜矢. (2013). 「記憶を活かした風景の再生——大槌町の実践より」, 大西隆・城所哲夫・瀬田史彦編『東日本大震災・復興まちづくり最前線』(pp. 219-237), 学芸出版社.
- 松本亮三. (2014). 「環境から生態系へ——自然と共に生きる」, 比較文明学会『災害と文明: 東日本大震災と防潮堤問題を考える・報告書』(pp. 4-6).
- Menary, R. (2010). Introduction to the special issue on 4E cognition. *Phenomenology and the Cognitive Sciences*, 9, 459-463.
- メルロ＝ポンティ, M. (1967/1974). 『知覚の現象学 1, 2』(1: 竹内・小木訳, 2: 竹内・木田・宮本訳) みすず書房.
- 三船康道, まちづくりコラボレーション. (2009). 『まちづくりキーワード事典(第3版)』
- 南博文. (2006). 『環境心理学の新しいかたち』誠信書房.
- 宮城県. (2015). 「宮城県における防潮堤災害復旧・復興の進捗状況」(<http://www.pref.miyagi.jp/uploaded/attachment/312463.pdf>)
- 村上暁信. (2012). 「21世紀の日本型田園都市の形成」, 日本造園学会編『復興の風景像——ランドスケープの再生を通じた復興支援のためのコンセプトブック』(pp. 44-47), マルモ出版.
- 長峯純一. (2015). 「復興に立ちはだかる防潮堤計画の見直しは可能か——気仙沼大島のケース」日本造園学会誌 (pp. 395-396)
- 内閣府. (2011). 中央防災会議, 東北地方太平洋沖地震を教訓とした地震・津波対策に関する専門調査会, 「今後の津波防災対策の基本的考え方について・中間とりまとめ」「中間とりまとめに伴う提言」(平成23年6月26日). (<http://www.bousai.go.jp/kaigirep/chousakai/tohokukyokun/pdf/tyuukan.pdf>) (<http://www.bousai.go.jp/kaigirep/chousakai/tohokukyokun/pdf/teigen.pdf>)
- 日本自然保護協会. (2013). 「海岸堤防・防潮堤復旧事業と海岸防災林復旧事業に関する意見書」(2013年2月4日) (<http://www.nacsj.or.jp/katsudo/higashinohon/20130204bouchouteiikensyo.pdf>)
- 太田裕彦. (2007). 「環境の評価・美学——景観を基礎として」, 佐古順彦・小西啓史編『環境心理学』(pp. 41-65), 朝倉書店.
- レルフ, E. (1999). 『場所の現象学——没場所性を越えて』(高野岳彦・阿部隆・石山美也子訳) ちくま学芸文庫.
- 篠沢健太. (2012a). 「グリーン for シニア」, 日本造園学会編『復興の風景像——ランドスケープの再生を通じた復興支援のためのコンセプトブック』(pp. 60-63), マルモ出版.
- 篠沢健太. (2012b). 「ランドスケープ再生による震災復興支援」日本建築学会・都市計画委員会編『東日本大震災と都市・集落の地域文脈——その解釈と継承に向けた提言』(pp. 39-42). (www.area-context.com/ 東日本大震災からの復旧—復興への提言)
- 武内和彦. (2012). 「ランドスケープ再生を通じた震災復興」, 日本造園学会編『復興の風景像——ランドスケープの再生を通じた復興支援のためのコンセプトブック』(pp. 11), マルモ出版.
- 竹沢尚一郎. (2013). 『被災後を生きる——吉里吉里・大槌・釜石奮闘記』中央公論新社.
- 田中克. (2008). 『森里海連環学への道』旬報社.
- 田中克. (2014). 「森里海の連環から震災と防災を考える」『防災と復興の知——3.11以後を生きる』(pp. 29-48). 大学出版部協会.
- 田中彰吾. (2011). 「身体イメージの哲学」, 『Clinical Neuroscience』第29巻8号, pp. 868-871.
- 田中彰吾. (2014). 「生きられる空間——空間を考えるための方法論的観点」, 学校空間研究者グループ編『学校空間の研究——もうひとつの学校改革をめざして』(pp. 59-71), コスモス・ライブラリー.
- Tilley, C. (1994). *A Phenomenology of Landscape: Places, Paths and Monuments*. Oxford: Berg.
- トゥアン, Y. (1993). 『空間の経験——身体から都市へ』(山本浩訳) ちくま学芸文庫.
- 横山勝英. (2014). 「地域の実情にそくした防潮堤計画を」, ホームページ「47行政ジャーナル」(2014年3月10日版) (<http://www.47news.jp/47gj/furusato/2014/03/post-1058.html>)

<その他>

- 仙台市ホームページ「フォトアーカイブ: 東日本大震災——仙台復興のキセキ」(<http://www.city.sendai.jp/soumu/kouhou/311photo/>)
- 環境省ホームページ「里海ネット」(<https://www.env.go.jp/water/heisa/satoumi/index.html>)